

2008年5月31日 号外



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：日本手の外科学会

広報委員会

日本手の外科学会理事長に 就任して

日本手の外科学会
理事長 三浪明男

目次

- 理事長に就任して
- 副理事長に就任して
- 理事に就任して
- 監事紹介
- 顧問紹介
- 編集後記

日本手の外科学会（日手会）会員の皆様におかれましてはますますご清栄のことと存じます。

さて、第51回日本手の外科学会学術集会総会において理事に推薦され、臨時理事会において第4代の日手会理事長にご推薦いただき、就任いたしました。浅学非才の身でこのような大任を担うこととなり、身の引き締まる思いとともに責任の重大さを痛感しております。会員の皆様のご支援があっはじめて業務を遂行できると考えておりますので、何卒ご高配のほどお願い申し上げます。

さて、前理事長の中村蓼吾先生が日手会専門医制度発足のために大変なご努力をされ、特例措置として現在500名余の日手会専門医が誕生しております。今年の10月末までが移行措置期間ですので該当される先生は手続きされることを忘れずをお願いします。

私の第一の仕事は発足したばかりの専門医制度がしっかりと軌道にのるように努力すべきことにあると思います。来年の堀内行雄会長が開催される第52回日本手の外科学会学術集会の翌日に第1回目の専門医試験が予定されています。日手会誌、日手会ニュースなどに試験実施要項等をお知らせいたしますので当該日手会会員の先生に周知いただき、受験していただければと存じます。

試験が終わりますと日手会専門医を社会的に認知してもらうことが私のもう一つの重要な仕事と認識しています。社団法人日本専門医制評価・認定機構（専認構）が次第に充実し、各科の専門医制度が社会的に認知される傾向にあり、これにより診療報酬などにも大きな影響を与えていることはご存知のとおりだと思います。しかし、多くの先生、特に歴代の理事長・理事・広報委員会の皆様のご努力のいかにもなく、日手会未だ日本医学会への加盟申請が成功しておりません。今後本申請の努力は間断なく行う必要があります。日本医学会加盟学会の理事長（代表者）などを知っておられる先生、関係ある先生は積極的に働きかけていただく、あるいは広報委員会へご連絡いただければと思います。専認構で認められる専門医としては学会団体そのものを法人化することが必須条件ではないかということがいわれております。今後法人化によるメリット・デメリットについて調査研究し、いろいろな手段で会員の皆様にお知らせしてご判断を仰ぎたいと思っております。

次の重要な仕事としては日手会の財政の健全化があると思います。臨時理事会の席でも各理事にお願いしたところですが、ご承知のように委員会活動の活発化により、年々活動費用が増加し、日手会は年400万円～600万円の赤字決算となっております。私は安直に会費の値上げをするのではなく、委

プログラム

9月6日(土) 第1日目

12:30~13:50

受付

14:00~15:00 「手の外科診察に必要な機能解剖」

上羽 康夫 (NPO 健康医療評価研究機構)

15:00~16:30 第19回日本末梢神経学会シンポジウム「手根管症候群」

16:50~17:50 「前骨間神経麻痺と後骨間神経麻痺」

田崎 憲一 (荻窪病院整形外科)

17:50~18:50 「末梢神経麻痺とリハビリテーション」

大山 峰生 (新潟医療福祉大学)

9月7日(日) 第2日目

8:50~9:50 「手と肘の診察法」

伊藤 恵康 (慶友整形外科病院)

10:00~11:00 「手術基本手技」

磯貝 典孝 (近畿大学医学部形成外科)

11:10~12:10 「手の先天異常」

高山真一郎 (国立成育医療センター整形外科)

12:10~13:00 昼 食

13:00~14:00 「手の関節変性疾患」

鈴木 康 (岐阜県総合医療センター整形外科)

14:10~15:10 「上肢の良性・悪性腫瘍」

和田 卓郎 (札幌医科大学整形外科)

15:10~16:10 「手の外科診療における医療安全と医事紛争」

梁瀬 義章 (長吉総合病院)

16:10 修了証書交付

※日本手の外科学会, 日本整形外科学会, 日本形成外科学会の教育研修講演単位として申請中。
 ※第19回日本末梢神経学会(会長 祖父江 元教授(名古屋大学神経内科))のご協力により、同学会のシンポジウムに参加できることとなりました。そのため今回は症例検討会は行いません。なお、本研修会にご参加の方は、第19回日本末梢神経学会に5,000円(通常10,000円)でご参加いただけます。

編集後記

新理事長, 理事の就任に伴い, 日手会ニュース号外が発行されました。各先生方にはご多忙中時間を割いていただき, 日手会ならびに各委員会が抱えている問題点と今後の抱負について力強く述べていただきました。専門医試験の開始, 学術研究プロジェクトの立ち上げをはじめ重要案件が目白押しです。広報委員会もこれまで以上の努力をしていく所存ですので, 会員の皆様方の一層のご支援を宜しくお願いいたします。(文責: 副島 修)

広報委員会

(担当理事: 田中 寿一 アドバイザー: 堀内 行雄 委員長: 副島 修 委員: 今谷 潤也, 小野 浩史, 佐藤 和毅, 白井 久也, 藤岡 宏幸)

員会の委員数の削減、委員会開催回数の減少などにより支出を極力抑えていただきたい旨を理事各位にお願いいたしました。この件につきましても会員の皆様に財政状態をガラス張りにお知らせしてご理解を得たいと考えております。

学術研究プロジェクト委員会で討議されていますように、日手会主導のできれば prospective なプロジェクトを遂行し、世界に発信していきたいと思っております。プロジェクトの応募についても近い将来皆様にお知らせしていきますので奮って応募していただきたいと思っております。

日手会は他の多くの整形外科関連学会が会員数を減らしている状況にもかかわらず会員数が増加しており、正会員で3000名を超えるまでに発展してまいりました。会員各位への情報を常に発信して会員への研修教育、先進的学術研究、国際化などを推進し、究極的には患者様の治療に反映させていただければと思っております。

再びのお願いで恐縮ですが、会員各位のご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

副理事長に就任して

副理事長 麻生 邦一

(学術研究プロジェクト委員会、
定款等検討委員会担当)

このたび三浪明男新理事長より引き続き副理事長を拝命いたしました。

副理事長の大きな仕事のひとつは、学会活動に伴う費用の支払い許可を行う、すなわち予算執行の目付け役です。例年通り各委員会活動が活発に行われることに加え、今年度から学術研究プロジェクト委員会とガイドライン策定委員会の2つの委員会が増え、それに伴って理事および委員も増えますので、一般会計では支出過剰の傾向にあります。会員の皆様の公金を預かっているという意識を強く持って、事務局と知恵を絞って無駄を省き、経費の節減に努めたいと思っております。

もう一つの仕事は新評議員の選定です。例年多数の新評議員の応募がありますが、皆さん素晴らしい業績をお持ちで、選ぶのに苦労するという嬉しい悲鳴をあげています。これまでの業績の「量」だけで評価するのではなく、今後は業績の「質」をも加味して厳正公平に評価すべきと、考えております。若手評議員こそが日本手の外科学会を活性化し、レベルを押し上げる原動力となりますので、どんどん良い仕事をして応募していただきたいと期待しております。

今期はさらに、学術研究プロジェクト委員会担当理事と定款等検討委員会担当理事を仰せつかりました。

第50回日本手の外科学会50周年記念式典におきまして、日本手の外科学会が世界のトップになる夢を披露させていただきました。第51回日本手の外科学会(落合直之会長)のスローガンは「次の一手 夢を語ろう つくばにて」でした。次の半世紀の飛躍の第一歩として、学術研究プロジェクトを立ち上げることが重要であると考えます。これまで各施設が各自で研究を競って参りましたが、今後は研究課題を決めて、学会が主導し、多施設が共同して、前向き研究を行うことで、エビデンスの高い研究発表が海外に向けて発信できるようになるものと考えます。今年度からこのプロジェクトが始動しますので、素晴らしい企画を持ってどんどん応募し、研究していただきたいと願っております。

また定款とは、法治国家でいう憲法のようなものであり、学会の在り方、進むべき道を示す規範となるべきものです。定款等検討委員会に於きまして、悲願である日本医学会加盟や法人化の問題など、今後進むべき道を議論して行きたいと思っております。

もとより浅学菲才ではありますが、いかなる時でも「是は是、非は非」と堂々と正論を言えるようにありたいと念じております。

これまでの2年間の経験を生かして、愛する「日本手の外科学会」のために、微力ではありますが、理事長を補佐し、粉骨砕身努める所存ですので、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

学術研究プロジェクト委員会

委員長 藤 哲

委員 落合 直之、浜田 良機、平田 仁、別府 諸兄、三浪 明男

定款等検討委員会

委員長 堀内 行雄 アドバイザー 長野 昭

委員 岡 義範、柴田 実、鈴木 正孝、藤 哲、水関 隆也、山本 謙吾

日本手の外科学会理事に就任して

越智 光夫

(倫理委員会担当)

このたび、日本手の外科学会理事を拝命いたしました。伝統ある日本手の外科学会の理事の一人として選出され、大変光栄に思うと同時に責任の大きさを感じております。少しでも会員の皆様のお役に立てることができるよう微力ながら誠心誠意努力させて戴きたく存じます。

昭和57年に日本手の外科学会で初めて発表を行い、その後も日本手の外科学会での発表とあとのディスカッションを毎年のように楽しんでまいりました。平成4年に評議員に選出され、教育研修委員会委員(平成7年～平成8年度)、教育研修委員会委員長(平成9年度)、編集委員会委員(平成10年～平成12年度)を務めました。例外的に出席できなかった年もありましたが、欠かさず出席し、手の外科発展を見守ってきました。私にとりましても、この学会は論理的な思考を学んだ重要な学会であります。

理事長の三浪先生を支え、活性化された学会を目指して参りたいと思っております。会員である皆様方の温かいご理解とご支援をお願いいたします。

倫理委員会

アドバイザー 塚田 敬義、浜田 良機

委員 浅見 昭彦、奥山 訓子、重富 充則、清水 克時、鈴木 茂彦、
渡邊健太郎

理事就任

加藤 博之

(専門医試験委員会、教育研修カリキュラム委員会担当)

伝統ある日本手の外科学会理事に就任し責任の重さに身の引き締まる思いです。私は医学部卒業後30年近く経ちますが、常に手の外科の指導者に恵まれて今日まで参りました。整形外科入局後の4年間の一般整形外科研修後に、石井清一先生に師事して手の外科の勉強を始めました。石井清一先生が札幌医大教授に赴任される直前の短期間でしたが、手術・診療の基本、研究に対する真摯な姿勢を聞

近にみさせていただき、私に医師としての理想をお示しいただきました。その後は、薄井正道先生、荻野利彦先生、三浪明男先生の主催する北大整形手の外科班に在籍し、ご指導を受けました。北大手の外科班は上肢全般を診療・研究しておりましたので、肩関節から手指まで広い範囲を勉強いたしました。石井先生に腱、薄井先生にマイクロサージャリーと腫瘍、荻野先生には先天異常、末梢神経、三浪明男先生にマイクロサージャリー、手関節、関節リウマチをご指導いただき、一緒に研究を行ってきました。この間に米国に留学して日手会 corresponding member であります J Ryu 先生にバイオメカニクスの指導を受けました。2003年より現在の信州大学整形外科に赴任しております。

このように私は手の外科医として特定の分野での業績はありませんが、幅広い手の外科全般の診療、研究歴があることが特徴です。また、東日本、中部日本と勤務地域が異動し、勤務先も大学と一般関連病院の期間がほぼ同じくらいですので、様々の異なった環境で手の外科医として活動してまいりました。これらの多様な経験が今後の手の外科の発展に寄与できると思っております。またこれまで多くの指導者から私が受けて参りました手の外科の魅力を、今度は日本の次世代の手の外科に興味を持っている医師に伝えて行きたいと思っております。

当面の日手会での仕事は専門医制度の立ち上げです。特に平成21年の日本手の外科学会学術集会の後に行われる第1回専門医試験を円滑に行い、試験によって認められた手の外科専門医を送り出すことです。手の外科専門医を国民の立場から考えますと、手・肘部の疾病や外傷の治療を安心して委ねられ、かつ一定レベルの診療技術を有する医師ということになります。医師の力量の判断基準には、医療機関の規模や質、執刀手術数、研究業績、患者さんやマスコミの風評など様々なものがあります。しかし現時点で国民に最もわかりやすい判断基準は専門医の資格を持っている、ことでもあります。整形外科あるいは形成外科で専門医として活躍し、さらに手の外科医として手の外科の研修（期間、病院、症例数、学会発表や論文数）が一定のレベルに達した医師が、手の外科専門医として適当かを判断する試験が専門医試験です。国民から手の外科専門医としての信頼を得て、手の外科専門医のレベルを一定に保ち、手の外科専門医のメリットとプライドを高めるには、受験生ばかりでなく研修指導者にも高い意識と臨床力が要求されます。また手の外科専門医試験の形式、出題問題の適否、合格率などを検討して行く必要があります。一般会員の皆様、研修医の皆様から当委員会へご要望、ご提案などございましたら、是非ともご意見をお寄せいただければ幸いです。

手の外科の学問的研究・治療法におきましては近年大きなブレイクスルーがないと指摘されます。しかし、確実に全体のレベルは上がっております。今後とも臨床の疑問にアプローチする基礎研究、エビデンスを提供できる研究を一步一步地道に進めていきたいと存じます。特に、臨床研究では所属機関の枠を超えた多施設共同研究の推進を進め、常に世界の手の外科のリーダーとして日本手の外科学会からの業績を発信できるよう尽力して参ります。どうぞよろしく願いいたします。

専門医試験委員会

委員長 和田 卓郎 アドバイザー 落合 直之、水関 隆也
委員 石田 治、佐藤 和毅、鈴木 克侍、田中 英城、平瀬 雄一

教育研修カリキュラム委員会

委員長 田嶋 光
委員 石川 浩三、長岡 正宏、橋詰 博行、山中 一良

理事就任

金 谷 文 則

(機能評価委員会, ガイドライン策定委員会担当)

この度は日本手の外科学会の理事に承認していただきありがとうございます。昭和53年に新潟大学を卒業後に整形外科に入局し、故田島先生をはじめ、多くの同門諸先生の教えを受け手の外科を学びました。昭和62年から3年弱、Kentucky州Louisvilleに留学しDr. Kleinert, Dr. TsaiのもとでHand & Micro Surgeryを勉強し、帰国後、茨木先生が主宰される琉球大学整形外科に勤務し、今日まで国内外の多くの先生にご指導いただきました。振り返ってみると整形外科に入局してから丁度30年になります。

整形外科が担当する運動器の中でも、上肢は人間と動物の違いが最も際立っています。ヒトは直立歩行をするようになり、上肢が体重を支える必要が無くなったことから「手」を道具として使い始めて文明が発達したと考えられています。ヒトの「手」はfree climbingに代表されるheavy dutyからマイクロサージャリーや楽器演奏に代表される繊細な動きまで可能な、ヒトが持つことのできる最も有用な道具です。コンパクトなスペースに骨、腱、神経、血管と様々な組織が詰まっているため、一旦損傷されると元の機能を回復させることが困難なばかりでなく、不要な侵襲によりさらに機能を低下させることさえあり得ます。「手の外科」では研究と経験に裏打ちされた組織の取り扱いsoft tissue handlingと、低侵襲手技atraumatic techniqueが重要です。外傷の治療の目的が解剖学的修復であることは論を待ちませんが、解剖学的修復ができない重度外傷のsalvage手術、腫瘍切除後の再建、先天異常の手術は哲学を持って治療計画を立てる必要があります。これら先達が築き上げてきた哲学、治療戦略を後進に伝承してゆくことが私たちの役割であり、少しでも新しい進歩を付け加えて引き継いで行きたいと考えております。

手の外科医は手先が器用なせいか、関節(人工関節)や脊椎(インストゥルメント)に比べて手術器具の開発が少ない傾向があります。国産では、Kエルポー、USEシステム、DTJスクリュー、ONIプレート、など優れた機器がありますが、医療器具の多くは外国製です。近年、アジアの経済発展と人口増加から、数年以内に欧米よりもアジアが大きなマーケットになることが予想されています。プレートや人工関節も、欧米人の解剖学的形態ではなくアジア人にあったものが求められています。日本のように資源が乏しくとも加工技術が優れた国では今後は付加価値の高い医療材料の開発が急務と考えます。この点においても日手会として何らかの貢献が可能と考えています。

今回、機能評価委員会とガイドライン策定委員会の担当理事になりました。世界に通用する日本発の機能評価法やガイドライン策定に向けて、委員の皆様と頑張っていきたいと考えております。委員の皆様には今後とも、一層のご指導、ご鞭撻、ご協力をお願い申し上げます。

機能評価委員会

委員長 面川 庄平

委員 今枝 敏彦, 五谷 寛之, 澤泉 卓哉, 百瀬 敏充, 森友 寿夫

ガイドライン策定委員会

委員長 澤泉 卓哉

委員 泉山 公, 長田 伝重, 面川 庄平, 坂野 裕昭, 戸部 正博,
長尾 聡哉, 南野 光彦, 西浦 康正, 森友 寿夫

理事就任

河井 秀夫

(用語委員会, 施設認定委員会担当)

この度、平成20年度日本手の外科学会理事に就任した星ヶ丘厚生年金病院の河井秀夫です。伝統ある日本手の外科学会の理事として、施設認定委員会と用語委員会を担当し活動できることは大変光栄です。私は、昭和57年1月12日に日本手の外科学会入会后、本学会を中心に医学研究、学術活動を行い育てられてきました。現在、星ヶ丘厚生年金病院副院長および整形外科の責任者として、後期臨床研修医を含む16名の整形外科医とともに診療活動を行っています。

医療環境の厳しい折、特に勤務医の勤務状況の困難性が認識される状況下ではあるが勤務医としての魅力、整形外科医としての魅力そして手の外科医としての魅力をいかに示すことができるかを模索しつつ、初期臨床研修医や後期臨床研修医をはじめ若い医師たちへのPR活動、院外での病院説明会や院内での病院説明会なども自分の役割と考え、病院の、整形外科医のそして手の外科医の魅力を語りつつ活動しています。

日本手の外科学会では専門医制度が始まり、平成20年4月には第1回専門医試験が予定されています。この専門医制度をうまく軌道に乗せ、手の外科医としての自己をいかに確立していくべきなのか、今大変重要な時期であると思います。手の外科専門医は一般医と比べてどのような点で優れているのか、日常の診療活動でいかに患者様に評価され期待されているのか、手の外科の専門的素養を身に付けていけば整形外科一般の診療にプラスとなり応用力のきく医師になっているのかなども大切な視点です。手の外科医とは、なにをしておりどのような医師であるのかの周知を一般人へも医師へも徹底することは、もちろん大前提です。

国民の医療に対する基本的な願いは、医師の質的向上と医療の安全性にあると言われています。この二つの願いに日本手の外科学会専門医は答えようではありませんか。

日本手の外科学会の発展のために、微力ながら役立つよう努力したいと考えています。

会員諸氏のご支援、ご鞭撻を何卒よろしくお願いします。

用語委員会

委員長 小林 明正 アドバイザー 岡 義範

委員 池田 全良, 黒島 永嗣, 坪川 直人

施設認定委員会

委員長 奥津 一郎 アドバイザー 堀内 行雄

委員 酒井 和裕, 島田 幸造, 西田 淳, 南川 義隆

理事就任

光 嶋 勲

(先天異常委員会担当)

平成20年4月に開催された第51回に本手の外科学会総会にて理事にご指名いただきました。前任の柴田 実理事に引き続いて形成外科医としての選出であり理事長はじめ学会の会員の皆様のご配慮に身の引き締まる思いであります。

これまで個人的に手の先天異常の治療に興味を持って術式の開発など細々とやってきましたが、今後はさらに高度の専門知識と技術をお持ちの本委員会の皆様と先天異常に関する新たな基準の創設に参加できるかと思うと今から心がわくわくしております。

本年度から川端秀彦先生を委員長とした新体制となります。これまでの目標であった手の先天異常懇話会の充実化、母指術後機能評価表に引き続いての合指術後機能評価表などの継続、改良を行なう予定であります。また私自身の使命として所属する形成外科学会との橋渡しに努力したいと思います。形成外科学会では手の外科を専門にする会員は未だ多くありません。とくに若い形成外科医に対して手の外科の面白さをアピールしたいと思います。より多くの形成外科医に手の外科学会に参加していただくことも重要と思います。

これからの2年間手の外科のために微力ながら頑張っ活動していきたいと思いますので御指導、御支援をよろしくお願いいたします。

先天異常委員会

委員長 川端 秀彦 アドバイザー 高山真一郎
委員 石田 治, 射場 浩介, 荻野 利彦, 香月 憲一

理事就任

佐々木 孝
(社会保険等委員会担当)

このたび平成20年4月16日に行われました評議員会で理事就任をお認めいただきました。学会での口演あるいは討論は多数してまいりましたが、学会の運営そのものにはこれまでほとんど関わってきませんでしたので、ご承認いただきました皆様に大変感謝しております。翌日開かれた理事会で、三浪明男理事長より社会保険等委員会担当理事を命じられました。私個人としましては、社会保険等委員会には、委員、委員長、アドバイザーとして過去6年関与し、故中村純次先生、原 徹也先生、露口雄一先生、吉村光生先生、龍順之助先生、立花新太郎先生のご指導のもとに活動してまいりました。外保連(外科系学会社会保険委員会連合)にも、手術委員会、実務委員会に参加し、厚生労働省のヒアリングにも日本手の外科学会代表として昨年参加いたしました。今期は担当理事として、牧野正晴委員長とともに、社会保険等委員会の領域で頑張りたいと思っています。

保険点数という、点数は学問ではないという声も聞こえてきそうですが、平成20年の札幌での日本整形外科学会学術総会(会長 三浪明男先生)では、整形外科医の近未来像というパネルが行われ、その場で日整会山本博司元理事長から、手術をする整形外科医の数を確保するためには手術報酬が飛躍的に引き上げられなければならない、という大変力強い言葉がありました。これは、整形外科全体的話ですが、手の外科にとっても状況は同じであると思います。もともと、手の外科専門の先生方は、腕自慢の方が多く、とくに後押ししなくても手術の技を磨くことに熱心な方ばかりであるとは思いますが、今後の若い力が手の外科に入ってくるように誘導するには、手の外科領域の技術評価も十分なものでなくてはなりません。ところが、外保連方式で計算すると、皆さんが少ない人数で、いとも簡単そうに手術が行われると、少ない労働力*短時間ということになって、非常に低い点数設定になってしまいます。とはいえ、今更時間をかけたり、助手をたくさん必要とするという主張は困難ですので、技術度という係数(外保連では5段階に分かれています)で考えてもらうしかしようがありません。しかしながら、技術度Bという最高難度は日本で数名の医師のみが施行するというような規定になっており、D難度までの範囲で考えていくしかありません。

手の外科領域では、新規手術の申請も最近は少なく、現在は「神経移植」を「骨移植」並みにすべての手術に100%加算できるよう手術の通側14に加えてもらうこと、ならびに伸筋腱脱臼整復術の新設を交渉中です。

このような個々の術式の申請とともに、日本整形外科学会とも共同で整形外科手術全体あるいは手

術科全体の拡大（増点）こそが、外科系医療を中心とする病院医療の活性化、医療現場からの立ち去りの防止に直結する問題と考え、今期の社会保険等委員会活動を指揮していきたいと思っています。大上段な話となりましたが、微力を尽くさせていただきますので、皆様のご協力をお願い申し上げます。

社会保険等委員会

委員長	牧野 正晴	アドバイザー	立花新太郎
委員	石突 正文, 市川 亨, 亀山 真, 河野 正明, 木原 仁		
	清重 佳郎, 高瀬 勝己		

理事就任

田 中 寿 一

(広報委員会担当)

今回で2期目の担当になります。前期で思い出に残る仕事として、日本手の外科学会20周年記念式典と祝賀会の開催を担当いたしました。また昨年秋には米国シアトルで行われた第62回米国手の外科学会で、本学会が、米国手の外科学会の栄えある第1番目のゲスト学会に選出され、この事業参加となりました。これらが、これまでの日本手の外科50年の総決算とすると、広報活動もさらに次の飛躍の50年に向かって活動していかなくてはなりません。幸いなことに、広報委員会の仕事は、他の委員会に比して、直接会員と接することが多く、仕事内容も理解され、やりがいのあるものと自負しています。

まず、会員との橋渡しとなる日手会ニュース（年2回発行）の更なる充実を目指すつもりです。次に、特に今期最も力を入れなければならないことは、日手会会員専用ホームページの開設です。現在、京葉コンピューターサービスと、事務局が現状のシステムとの連携につき検討し、ベースとなるシステムの開発に着手しています。日整会で実施されている会員管理システムとのすりあわせを計り、専門医単位の記録やカード決済の早期実現に向け、将来的な拡張性を念頭に進めていくつもりです。これには、幸いなことに新理事長が日整会カードの本格的始動となる第81回日本整形外科学会の会長であり、そのノウハウを十分共有できると期待しています。一方、会員数の違いや、日形会との合同学会であることなど、日整会との完全一致は、難しい面も依然残っています。しかしこのことは、逆に本学会独自のきめ細やかなシステムの構築も可能ではないかと考えています。次に、発行以来、好評を得ている日手会パンフレットは、見直し作業が終了し、1～15までのDVDが完成しています。DVD第2部に関して、第1部の販売状況、会員からのご批判を参考にして、見直し・作成を開始予定です。また、新規作成分として25.合指症、26.母指多指症を完成し、TFCC損傷の作成に取り掛かっています。その他のテーマに関しては、必要性に応じて順次考案する予定です。日手会グッズについて、田島達也先生原作のタイピンの復刻版を制作中です。そのほか、「運動器の10年」日本委員会への参加や、念願の日本医学会加盟への申請をさらに継続し、実現に向けて努力してゆくつもりです。

今回、新たに3名の新委員を迎え、前回の委員会以上のパワーで活動していきたいと思っています。さしあたり、継続理事の一人として、前理事長中村先生と新理事長三浪先生との継続が上手いように努力したいと思います。

広報委員会

委員長	副島 修	アドバイザー	堀内 行雄
委員	今谷 潤也, 小野 浩史, 佐藤 和毅, 白井 久也, 藤岡 宏幸		

理事就任

平 田 仁

(編集委員会担当)

この度編集委員会担当理事を拝命いたしました。手の外科学会で最も大きな予算を配分され、人材の育成や学会の発展に直結する極めて重要な仕事を担当する事になり、その責任の重さに身の引き締まる思いをしています。これまで河井前理事の元で編集委員長として務めさせていただきましたが、この間に日本手の外科学会誌の現状と問題点を私なりに理解したつもりです。

最も大きな問題としては編集作業の慢性的な遅れがあります。査読制度の導入以来掲載される論文の質は大いに改善されましたが、一方で編集作業の遅れが慢性化し、多くの会員からご批判を頂いています。現在日本手の外科学会誌に掲載される論文の約8割を学術集会発表論文が占めますが、投稿規程に示された提出期限である学術集会終了後3週間以内に投稿される論文は少なく、このため期限を7月末日まで延長してきました。しかし、それでも投稿数は学会発表論文の35.5%に留まっています。投稿される原稿も極めて完成度の高いものばかりではなく、採択までに数度の修正を要求される例も稀ならず見られます。他にも様々なテクニカルな問題もあり、投稿から論文の掲載にいたる過程を抜本的に見直さなければ目に見える改善を期待することは難しい状況と考えています。

第二の問題として財務状態の悪化が挙げられます。従来雑誌への広告募集は専門業者に委託しておりましたが、2年前からは編集委員会自らがこれを行う事になりました。しかし、製薬・医療機器メーカーは学会誌への広告を縮小する方向に動いており、以前のように簡単には広告募集には応じてもらえず、大変悩ましい状況に陥っています。背景には学会誌に掲載する広告の経済効果に対する疑問があり、雑誌のあり方を今一度根本から見直す必要を感じています。

専門医制度が始まり、学会誌にはこれに対応した新たな役割が加わる必要がありますが、この問題に対しても現在までほとんど議論されずに来ています。また、オンラインジャーナルやオンライン投稿なども早急に検討されなければならない課題と考えます。医療を取り巻く状況が急速に変化する中で手の外科学会もそのあり様を変えていかなくてはならず、この点で機関誌の担うべき役割は極めて大きいものと考えています。池田和夫新委員長の下で尼子雅敏委員、岩崎倫政委員、岡島誠一郎委員、長田伝重委員、瀧川宗一郎委員と共にこれらの問題に明確な改善策を見出せるように鋭意努力していく所存です。会員の皆様の惜しみないご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。

編集委員会

委員長 池田 和夫

委員 尼子 雅敏, 岩崎 倫政, 岡島誠一郎, 長田 伝重, 瀧川宗一郎

理事就任

別 府 諸 兄

(国際委員会, 専門医制度委員会担当)

日本手の外科学会は、平成20年4月から三浪明男新理事長のもと新体制になりました。私は、日本手の外科学会専門医制度委員会および国際委員会担当理事をおおせつかり、大変光栄であります。平成19年4月19日から20日まで、山形大学医学部荻野教授が会長で日本手の外科学会50周年の記念事業が開催されました。幸い海外からも多くの先生が参加され、素晴らしい記念式典が行われました。

一方、平成18年から日本手の外科学会は脊椎脊髄病学会に続き、整形外科領域において専門医制度特例申請を始め、平成21年4月からは専門医の試験が開始になります。専門医制度委員会は資格認定

委員会、専門医試験委員会、教育研修カリキュラム委員会、施設認定委員会の要になる委員会で、これらの委員会の各担当理事に加え土井一輝先生も委員であります。この専門医制度委員会では、まず来年の専門医試験の開催に向けての準備を行います。また、専門医制度が確立していく場合には、学会法人化の検討も必要になります。

また、平成19年9月26日より29日まで、ワシントン州シアトルで第62回米国手の外科学会が開催されました。ASSHは今年度よりInternational Guest Societyという制度を設け、日本手の外科学会は、栄えある第1回目の受賞学会となりました。これは今までの国際委員会委員、ならびに山内先生、阿部先生らのご尽力の賜であります。

2009年11月には第8回アジア・太平洋手の外科学会(8th APFSSH)が台湾で開催されます。さらに、国際手の外科学会(IFSSH)は2010年10月に韓国で主催され、日本手の外科学会にPost-Congressの依頼がありました。この2010年の春には第5回の日米合同手の外科会議が開催される予定です。従いまして、理事会は両学会を2010年11月4日から6日に東京で同時開催することを決定いたしました。本学会では5th Combined Meeting of the Japanese & American Societies for Surgery of the Hand and 11th IFSSH Post-Congress Japanとし、準備委員会を組織する予定になっています。その他HKSSH-JSSH Exchange Traveling Fellow, JSSH & ASSH Traveling Fellow, Japan Hand Fellowなどの選考と、Bunnell Traveling Fellowの訪問日程確認などを行います。

最後になりましたが、会員の皆様のご協力を賜りたく宜しくお願い申し上げます。

国際委員会

委員長 堀井恵美子 アドバイザー 阿部 宗昭
委員 池上 博康, 五谷 寛之, 砂川 融, 松下 和彦, 村瀬 剛

専門医制度委員会

委員長 土井 一輝
委員 加藤 博之, 河井 秀夫, 矢島 弘嗣

理事就任

矢島 弘嗣

(教育研修委員会、資格認定委員会担当)

このたび手の外科学会の理事として、教育研修委員会と資格認定委員会を担当することになりました。奈良県立医科大学の矢島です。来年度から専門医の試験が開始される重要なこの時期に理事を拝命したことは、非常に光栄に思うとともに、責任の重さを痛感致しております。

さて、教育研修委員会は私が初めて評議員になったときに委員として属していたところで、当時と異なっているのは学会長あるいは秋の研修会会長ではなく、教育研修委員会が主催しているということです。会長がおられないことにより幅広く講演者を集めることができますが、最も問題になるのがスポンサーでしょう。最近スポンサーになる企業を見つけるのが大変な時代になってきました。しかしながら、若い先生達を教育することの重要性を企業に説明して、研修会のスポンサーを募ろうと考えています。ただし以前のように右から左にYESといってくれる企業はありません。最近公共の施設でも名前を売るいわゆるネーミングライツなるものが行われています。そこまでは必要ないかもしれませんが、やはりスポンサーになっていただく企業に対しては、教育研修委員会もそれなりの宣伝効果を提供する努力も行うべきであると考えています。そしてできれば、春、秋とも1つの企業にスポンサーをお願いしたいと思っております。その他ビデオの作製に関しては、鈴木委員長が中心になって今年中に配布できるように準備している状況です。

今年の特例措置による専門医申請の最終年となります。申請期間は10月1日から31日までで、その審査終了後にすぐに専門医試験の募集に移らなければなりません。そして受験生の審査ならびに試験の結果により可否の判定を行わなければなりません。とくにどの程度の受験生を合格させるかということは、専門医としての一定の質を保つためには重要であり、80%以下に抑えるべきであると考えています。この点は非常に重要な案件であり、専門医各部会の理事ならびに委員長としっかり意見を交わして決定しなければならないと思っております。以上所信表明ではありませんが、私が考えていることを書かせていただきました。教育研修、資格認定ともこれからの若い世代に関わることであり、微力ではありますが手の外科学会の発展に寄与していきたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

教育研修委員会

委員長 鈴木 康
委員 磯貝 典孝, 稲垣 克記, 酒井 直隆, 清水 弘之, 高原 政利,
根本 孝一, 山本 謙吾

資格認定委員会

委員長 中島 英親
委員 石川 淳一, 澤泉 卓哉, 西 源三郎, 牧野 正晴, 正富 隆,
村上 恒二

監事紹介

浜田 良機 梁 瀬 義章

顧問紹介

阿部 宗昭 中村 蓼吾

日本手の外科学会 第14回秋期教育研修会のご案内

- 会 期：平成20年9月6日(土)・7日(日)
会 場：名古屋国際会議場 〒456-0036 名古屋市熱田区熱田西町1-1
企 画：日本手の外科学会教育研修委員会
共 催：エーザイ株式会社
協 力：第19回日本末梢神経学会
受 講 料：20,000円 (テキスト代, 2日目の昼食代を含む)
※日手会・日整会教育研修単位受講料は別途
申込方法：ハガキに氏名(ふりがな)・連絡先住所・連絡先電話番号/ファックス番号・メールアドレス・勤務先・卒業年度をご記入の上, 下記宛お申込みください。
申込締切：7月末日 ※先着200名とさせていただきます。
申 込 先：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013 (筒)ヒズ・ブレイン内
日本手の外科学会事務局「日手会第14回秋期教育研修会事務局」宛
TEL 052-836-3511 / FAX 052-836-3510